様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７２０１０１
研究課題名（和文）　英国モダニズム文学における〈情動〉と「公共性」の変容

研究課題名（英文）　The Transformation of “Affect” and Publicness in British Literary Modernism

研究代表者　秦　邦生（SHIN KUNIO）
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：００４５９３０６

研究成果の概要（和文）：本研究は、〈情動〉についての近年の批評的関心の台頭を踏まえて理論的枠組みを構築しつつ、英国モダニズム文学が同時代の「公共性」の変容過程に積極的に参入するさまを検証した。〈情動〉を個別作品の内面性や自律性を掘り崩す要素と見なすことで、シンクレア、ワイルド、ウルフなど、さまざまな作家の作品が同時代社会に批評的に介入し、それらが共同体の再編に向けたユートピア的衝動に駆動されているさまを浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：This project investigated how British Literary Modernism was actively engaged in the transformation of “publicness” around the early twentieth century by focusing on the question of “affect”—a new theoretical perspective provided by the recent rise of interest in this particular issue. By regarding “affect” as an element which disturbs the inwardness and autonomy of individual works, this project revealed how the works of diverse writers such as Sinclair, Wilde, and Woolf critically engaged with their contemporary society and how their various attempts were driven by the Utopian impulse which aimed at the reconfiguration of community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成２２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成２３年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：モダニズム、公共性、情動、文学

１．研究開始当初の背景

これまでの英国モダニズム文学についての研究は、その美学の特徴を登場人物描写の「内面性」や「自律性」によって定義づけ、その「作品」としての技法的実験や洗練ばかりを強調してきたが、その結果、一方ではモダニズムが「堕落」した社会からは隔絶した「芸術」として偶像化され、他方では、その裏側に潜む大衆蔑視・エリート主義に対して過剰な反発と批判を招く、という悪循環の様相を呈していた。

1990 年代以降のこの分野の研究動向は、このような従来のモダニズム観の硬直性に対して、文化研究や文化史的な手法を導入することで、その修正のために一定の成果を挙げてきた。例えば Lawrence Rainey や Mark S.

Morrisson に代表される動向は、二項対立的に理解されてきたモダニズムと市場経済や出版市場との逆説的な接点に着目することで、モダニズムと大衆文化との真に複雑な関係を浮き彫りにした。また、写真や映画など、当時の新興メディアとの同時代性に着目した研究（Karen Jacobs, Sara Danius など）は、テクノロジーによる近代人の知覚の変容の表現としてモダニズムの実験を理解する道を切り開いた。だが、前者の動向は、物質主義的アプローチによって、結局はモダニズムの美学的可能性を封殺してしまった。後者もまた、テクノロジーによって一方的に構築・変容される身体感覚というモデルに美学を封じ込めることによって、本来問われるべき社会的変化の次元を切り捨ててきたと言えるだろう。この局面では、歴史主義への転回は、美学についての理解の貧困化という副産物をともなっていた。

この研究計画が〈情動〉という要素に着目したのは、こうした研究動向の成果を踏まえつつも、上述したようなこれまでの研究の問題点に対してあらたな批評的介入を試みるためだった。「知覚・情動の歴史」と呼ばれる研究は Peter Burke に代表される初期近代社会を対象とした文化史の分野ではいくぶんの積み重ねがあるが、批評理論や近代文学・表象研究において〈情動〉への関心が高まったのは、ごく近年のことである（Patricia Ticineto Clough, ed. The Affective Turn: Theorizing the Social [Durham: Duke UP, 2007]などを参照)。しばしば「情動論的転回」と呼ばれるこの批評動向の要点は、個人主義的観点から内面的・私秘的なものとして理解される「感情(emotion)」に対して、共通感覚的な身体性と社会性を備え、集団的な実践やテクノロジー／メディアによる介入を通じて不断に生産・再生産されるものとして〈情動(affect)〉を措定することにある。言いかえれば、〈情動〉とは個人の自我の内側にとどまるものではなく、むしろ複数の人間のあいだの関係性の場に生じる〈触発〉、そして、それが伴う社会性の複雑な変容の契機に目を向ける観点である。

以上で述べたように、「感情」を〈情動〉という観点から再解釈し、その具体的な表現を英国モダニズム文学のなかに読み解いてゆくことは、モダニズム文学・表象の美学的な次元の実験性・革新性をあらためて問い直すと同時に、それを従来の偏狭な「内面性」や「自律性」といった作品観から解放することにも結びつくという予測が、当研究開始当初の背景としてあった。

２．研究の目的

１で述べたことを踏まえ、この研究課題が目的とするのは、1990 年代までの英国モダニズム研究に見られた文化研究的アプローチの限界を見定めつつ、2000 年代に入って人文諸学において関心の急速な拡大が見られた〈情動〉についての最新の議論を導入することで、英国モダニズム観の具体的な再考を提起することである。

伝統的な公私の峻別には包摂されず、むしろその境界の逸脱を可視化する概念として、20 世紀前半の英国モダニズム文学に見られる〈情動〉の変容を跡づける作業は、19 世紀末以降に台頭した大衆文化による公共圏の構造転換についての理解を飛躍的に深化させる可能性を持っている。Jürgen Habermas がかつて市民社会の台頭を踏まえて示した「公共性の構造転換」という認識は、理性中心主義的な枠組みを採用したことが一九世紀末以降のさらなる構造転換の性質に対する死角を生み、この時代については一面的な評価しか下せていなかった。この研究では「対抗的公共圏」についての Michael Warner の研究（Publics and Counterpublics, New York: Zone, 2002）に依拠し、20 世紀モダニズム期の文化・社会の転換においては〈情動〉の変容こそが中心的役割を果たしたことを確認する必要がある。このような認識はまた、〈情動〉の生産と再編成に直接に関わり、再帰的に介入してゆくものとしてのモダニズム文学の美学的次元を再認識することを目指すものだった。

具体的には、本研究では、1920 年代に最盛期を迎えた英国モダニズムの（特に小説における）実験、という文学史観をとりあえず踏襲しつつも、その評価点を実験的作品や文体の完成度だけに求める従来の批評の射程を拡張することを目的とした。事例的には、1920 年代の盛期モダニズム作家のなかでも、従来から作品に高い評価を得ている Virginia Woolf のみならず、作家としての評価は未確定でも、前衛芸術運動に直接関与した経歴を持ち、画家でもある Wyndham Lewis の重要性を措定する。また Virginia Woolf については、個別作品の読解にとどまらず、女性参政権運動や、第一次世界大戦勃発以前のイタリア未来派という前衛芸術運動や、1930 年代の政治的状況のなかで復活した宣言文・声明文といったより公的な言語ジャンルとの複雑な関係性を探求する。さらに言えば、ほかの複数の作家をインターテクスト的にあわせ読み、同時並行的に研究を深めることで、さまざまなモダニズム作家のあいだの共時的関係性に着目するのみならず、盛期モダニズムに先駆けた 19 世紀末以降の初期モダニズムの作家たち（例えば、Oscar Wilde や May Sinclair)、20 世紀後半にモダニズムの遺産を色濃く受け継いだポストコロニア

リズムの作家（J. M. Coetzee など）にも射程を延ばし、「モダニズム」を軸とした通時的関係性にも着目する。そうすることで、〈情動〉というテーマの拡がりと持続性を具体的な事例研究をつうじて確認し、ひいては個別の諸作品と、公共性・社会性の具体的変容との相互関係を探求すること、つまりインターテクスト性の観点からモダニズム研究の通時的・共時的射程を押し広げることも、本研究の目的のひとつであった。

３．研究の方法

以上で述べてきたように、本研究課題は、一方では、現代における〈情動〉についての批評的・理論的研究の発達を踏まえつつも、他方では、19 世紀末以降の英国モダニズム文学の歴史的展開のなかに、公共性や社会性の複雑な変容を見いだす試みである。そのため、以下(1)から(3)までの３つの作業が、今回の研究課題にあたっての主要なアプローチとなった。

(1)まず、2000 年代に入ってから急速に深まった、「感情」や〈情動〉にまつわる批評的・理論的文献を収集・精査し、最新の議論の現状を整理するとともに、個別・具体的な作品や事例を検討する際の理論的枠組みの構築をおこなう必要があり、研究初年度から取り組んだ。そのため、哲学、現代思想、文学・文化研究にわたるはばひろい文献資料を収集し、議論の展開おおまかな把握を続けたが、その過程で、「感情」や〈情動〉に対する関心がかならずしも最近になって急激にあらわれたものではなく、フランスの現代思想家 Gilles Deleuze の哲学や、イギリスの文学・文化研究者 Raymond Williams の理論など、何人かの先駆者から成るある種の思想的伝統を持っていることを確認した。そのためこのアプローチでは、理論的枠組みの構築のみならず、「感情」や〈情動〉にまつわる思想史の展開の追跡という二重の作業を追求することとなった。これは同時に、現代の「情動論的転回」を決して自明視することなく、その転回がいかにして発生したのかについて歴史的・社会的文脈からの理解を試みる、という理論的枠組みについての反省的省察を含むことにもなった。

(2)第二のアプローチとして、上記(1)の後半部分とも関連するが、「感情」や〈情動〉の変容、ならびにそうした変容に対する批評的自意識の発生を歴史的・社会的文脈に位置づけるために、とりわけ 19 世紀末から 20 世紀初頭にいたる時代のジャーナリズムやパンフレット類、映像資料、思想的・美学的文献の収集・調査をおこなった。ジャーナリズムやパンフレットに関しては、20 世紀初頭の女性参政権運動、未来派や渦巻派などの前衛芸術運動、1930 年代の宣言文や声明文など、公共圏に積極的に介入し、その改編を試みたさまざまな動きにまつわる資料を重視したが、これらについては日本では参照困難な史料も含まれるため、初年度・最終年度にイギリスの British Library や British Film Institute などで関連資料のアーカイブ調査を行った。また、これは Justus Nieland が著書 Feeling Modern: The Eccentricities of Public Life (Urbana: U of Illinois P, 2008) で指摘していることだが、この時代の〈情動〉と公共性の変容を考察するうえで、パフォーマンスや映像などの大衆文化を重視する必要性が研究途中で高まったため、その関連資料の収集・研究もおこなった。

(3)第三のアプローチは、個別の事例研究・作品研究を相互に結びつけ、個々の作家たちを孤立した主体として扱わないために必要な、「インターテクスト性」の追求である。そもそもこの研究開始当初に重視したモダニスト作家 Virginia Woolf と Wyndham Lewis にしても、従来はたんに対立する作家として扱われることが多かったが、本研究のアプローチとしては「モダニズム」と「前衛芸術」の表面的対立ではなく、むしろ深層での問題意識やディレンマの共有をあぶりだすことを試みた。また、盛期モダニズムを特権視することなく、ほかのさまざまな作家との共時的・通時的つながりを探求するために、特に研究計画の初年度後半から二年目にかけて、モダニズム時代のアメリカ文学、D. H. Lawrence、Oscar Wilde などほかの作家の研究者との共同で諸学会での口頭発表をおこなった。特に二年目の冬には British Association of Modernist Studies 主催の国際学会に参加し、1910 年という特定の年号を起点として、複数の作家・作品・事例のあいだに成立する共時的インターテクスト性について意見交換し、知見を深めた。これらの作業は、実際に個別の作品・作家を題材として論文執筆をおこなう際にきわめて有意義であった。また、〈情動〉の表現とそれに対する再帰的意識、とりわけ「恥辱」というテーマが、これらのインターテクスト間の関係性を規定する要素として大きく浮上したことをここで付言しておく。

４．研究成果

以上からあきらかなように、本研究課題はひろい理論的・歴史的問題設定を構築しつつ、具体的な〈情動〉と公共性の変容を事例・作品研究によって深めてゆく手続きをとっており、その研究成果は以下のように(1)から

(3)のように整理できる。

(1)まず初年度には、基礎的・理論的研究の充実を図るとともに、抽象的になりがちな〈情動〉理論を具体的に考察するためは欠かせない歴史的・社会的条件との関係について理解を深めた。本研究の主な焦点は 20 世紀前半のモダニズムにあるが、その現代への継承という観点から、まず南アフリカ出身のポストコロニアル作家 J. M. Coetzee（モダニズムに深い影響を受けている）の小説 Disgrace について論文を執筆し、7 月に公開した。この研究の結果、一方では具体的な歴史・社会的問題に発しつつも、同時に困難な共同性の可能性をかいま見させる「恥辱」という情動の特殊な性格について理解を深めることができた。同時に、「恥辱」という情動については 19 世紀の生物学者 Charles Darwin から 20 世紀ドイツの思想家 Walter Benjamin にいたるはばひろい省察が展開されていることに着目し、その伝統が Coetzee へと受け継がれていることを論証し、インターテクスト的な研究・分析にとってのこの情動への注目の有効性を確認した。

また、同年の夏には、Virginia Woolf の情動表現と、第一次大戦前後の前衛芸術運動について論文を執筆し、10 月に出版した。この論文は、Woolf のモダニズムと、当時の女性参政権運動、そしてイタリア未来派の前衛芸術とのあいだの、従来顧みられてこなかった関係を当時の「公共性」の変容という見地から探求したものである。この研究で私は、従来は反感情的なものとして理解されてきた「没個性(impersonality)」の美学を、モダニズムの〈情動〉への関心という観点から捉えなおす可能性を示唆した。具体的に述べれば、「没個性」は従来考えられてきたような知的卓越性の誇示や、社会的ディレンマの回避といった消極的要素ではなく、孤立した「自我」の解体と共同性の再構築というより積極的な要素を読み込むことができる（Virginia Woolf の小説 Mrs. Dalloway や To the Lighthouse にそのような契機は実際に確認できる)。ただし、Woolf においてそのような「没個性」の美学はジェンダーという社会的・歴史的制約に繰り返し直面しており、その点に Woolf 的モダニズムの特殊性を認識することができる。

また、当時の歴史的状況における〈情動〉をさらに具体的に理解するためには、身体性の問題、さらにその特殊近代的な支配形態である「生政治(biopolitics)」との関係性を探求する必要があり、このような理論的観点の検討のために、2009 年 11 月には日本英文学会関東支部にて、他の研究者２名とシンポジウム「バイオポリティカル・モダニズム――ジェンダー、人種、アメリカ」を行った。このシンポジウムにおける口頭発表では Wyndham Lewis における人種観と、彼の諷刺的小説における特殊な情動表現との関連性を探求した。この問題設定は非常に大きな歴史的射程を持つものであるため、今後さらに研究を深める必要がある。

(2) ３年に渡る研究計画の２年目には、初年度におこなった基礎的・理論的研究の充実を踏まえて、本研究の主な焦点である 20 世紀前半のモダニズムの関連作家における情動・感情の主題についてインターテクスト的な考察を深めた。まず「気持ち／感情」と題した短い論文では、近年の情動論的転回の概略をまとめつつ、その転回の発生経緯につい歴史的・社会的文脈からの理解を試みる、という理論的枠組みについての反省的省察をおこなった。社会学者 Arlie Hochschild は、The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling (Berkeley: U of California P, 1983)において対人関係を中心とするサーヴィス産業における「感情労働(emotional labour)」の台頭を先駆的に指摘しているが、この議論はより最近でも、Michael Hardt and Antonio Negri の Multitude: War and Democracy in the Age of Empire (London: Penguin, 2005)などにおいて「情動労働(affective labour)」の全面化として継承されており、このような変容を「情動論的転回」の現代的文脈として理解することの重要性を指摘した。同時に、イギリスの文学・文化研究者 Raymond Williams は「感情の構造(structure of feeling)」という用語で、早くから私的でも公的でもある新たな〈情動〉の領域の探求を開始しており、歴史批評的な観点からその探求を継承することを今後の課題として提示した。

同年 6 月には、その Raymond Williams も重視したモダニズム作家 D. H. Lawrence について口頭発表をおこない、Lawrence の詩学における〈情動〉の「没個性的」側面に着目した。これは Lawrence のイタリア未来派に対するインターテクスト的な言及に注目しつつ、すでに前年度に刊行した Virginia Woolf 論における「没個性」の逆説を同時代のほかの作家にも確認する作業として位置づけられる。また、12 月には 20 世紀前半のモダニズム作家の先駆けでもある 19 世紀末の作家 Oscar Wilde の批評について口頭発表を行い、Wilde の批評作品に見られる特殊な情動観、とりわけ「恥辱」という形象が当時の社会への批評であると同時に、自己の変革へと向けたユートピア的衝動の発露の媒介となっていることを確認した。

(3)この研究課題の最終年度である３年目には、１年目と２年目におこなった情動理論に

まつわる基礎研究をベースに、イギリスにおける「モダニズム」の歴史的展開を踏まえて、具体的な作家・作品分析を仕上げることを目的に据えた。そのうえで特に注目したのが、しばしば「19 世紀的リアリズム」によって特徴づけられるヴィクトリア朝の文学と、20 世紀初頭における盛期モダニズムの台頭との境界線上に位置する、19 世紀末に活躍した作家たちであり、この研究では特にその作家たちを「初期モダニズム」ないし「発生期のモダニズム」と位置づけ、共時的観点よりは通時的観点を強調した。

まず、Tsuda Review に掲載した論文では、19 世紀末に作家としてのキャリアを開始した May Sinclair の作品を、自然主義作家 George Gissing の作品と比較した。Gissing に見られる公衆に対する世紀末的不信とは対照的に、Sinclair の小説は文学・文化と社会との互恵的な関係性を想像しており、特にその想像が T. H. Green 的 British Idealism の思想に影響を受け、「名誉／恥辱」という感情の語彙に依存している点を指摘した。なお Green の思想は 19 世紀末以降、T. H. Hobhouse など当時の社会改良運動である「新自由主義」に大きな影響を与えたことが先行研究によって確認されており、このような公共性を持つ思想がモダニズム台頭前夜の時代に見いだされることはきわめて意義深い。だがこのような Green 的感情の語彙の有効性は、Sinclair 自身がのちの作品で特にジェンダーの見地から疑問に付すものでもあり、当時の社会改良運動の方向性と、ジェンダーについての Sinclair の問題意識が葛藤しつつ同居しているのが確認できる。論文の結論としては、このようなディレンマのなかに Sinclair のモダニズムへの漸進的移行が観察できると論じた。

次に、『オスカー・ワイルド研究』に掲載した論文では、前年度の研究発表の成果を踏まえて、Oscar Wilde の作品における「批評／批判」というテーマの変遷をたどりつつ、そのなかにいっぽうでは盛期モダニズム的な大衆文化蔑視、他方では、自己変容的な情動をともなう「ユートピア的衝動」の実演が見てとれることを指摘した。後者の点は特に、Wilde の社会主義論と獄中書簡をつなぐ線に見いだすことができる。イギリスの盛期モダニスト、例えば Wyndham Lewis や T. S. Eliot はしばしば Wilde に対する両面価値的な態度を示しているが、Wilde の批評の再読と同時にこれらのモダニストの Wilde 観をインターテクスト的に再検討することにより、この論文では、初期モダニズムの角度からの盛期モダニズムの見直しの方向性を示した。この論文で確認できたのは、初年度の J. M. Coetzee 研究で論じた「恥辱」という情動の両面価値的可能性である。具体的には、Wilde の獄中書簡に見られる「恥辱」という形象は、同性愛の断罪による投獄という社会的不正義を背景とした伝記的受難から生じているが、書簡の書き手はこの受動的受難を積極的にとらえかえし、剥奪状態を精神の純化として意味づけなおすことによって、「恥辱」を社会規範への批評の手段へと転化している。〈情動〉と公共性を考えるうえで、ディレンマと可能性の逆説的な共存が繰り返し確認できるが、Wilde のケースはそのパターンを初期モダニズムの段階で模範的に示す事例と理解できる。

以上、研究の主な成果を記述してきたが、今後の展望をまとめてしめくくる。第一に、ここ 10 年急速に台頭した〈情動〉にまつわる文学・文化研究は決して一枚岩のものではなく、それに対する批判も存在する。例えば Ruth Leys は一連の論文で、一部の情動理論が人間の意識的・理性的意志決定を過小評価することで、イデオロギーや政治の議論を等閑視すると批判している。これに対して、本研究の成果、特に Virginia Woolf 論で確認した「没個性」の美学や、Oscar Wilde 論で見たユートピア的衝動は、ひとつの応答となる可能性がある。すなわち、〈情動〉を介した公共性の変容は必然的にユートピア的側面を持ち、ユートピア的運動に特有のディレンマにつねにつきまとわれているのではないか、という仮説である。この点は、Fredric Jameson の Archaeologies of the Future (London: Verso, 2005)以降に復興した近年のユートピア研究の動向とあわせてさらに検討しうる問題である。

第二の展望として、〈情動〉の研究、とりわけ「恥辱」の研究をつうじて、モダニズム文学とポストコロニアリズム文学研究をより豊かに交錯させる可能性がある。例えばすでに、Timothy Bewes は最新の研究 The Event of Postcolonial Shame (Princeton: Princeton UP, 2011)において、ポストコロニアル文学的営為全般に「恥辱」の情動を読み込んでいる。Bewes の著作は、帝国主義の時代以降における「倫理」の不可能性という非常に大きな枠組みを前提として、さまざまな事例・作品を取り上げた野心的な議論であるが、おもに 20 世紀後半の文学を扱っており、本研究成果において特に注目したモダニズムについてはあまり注目していない。この観点から新たな事例研究を積み重ねることで、モダニズムとポストコロニアリズムとをつなぐ線をあらたに引き直す可能性が開かれる可能性がある。

最後の展望としては、文学研究と文化研究のより緊密な連携である。この研究では英国モダニズム文学に軸足を置いたが、研究計画第二年であきらかになったように、この時代

の〈情動〉と公共性の変容を考察するうえで、パフォーマンスや映像などの大衆文化を重視する必要性は明白である。また、とりわけ人間の知覚に強い刺激をあたえる映像研究の分野において、情動理論への関心が近年高まっている。本研究の遂行した理論的枠組みの構築は、はそのような言語と映像の境界をまたぐ横断的研究の基礎作業としても発展的に活用しうるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① KUNIO SHIN、“Social Solecisms” and Their Discontents: The Politics of British Idealism and Emergent Modernism in the Works of May Sinclair and George Gissing、The Tsuda Review、査読無、56 巻、2012、57-82

② 秦邦生、深淵のユートピア――ワイルドとモダニズムにおける批評言説、オスカー・ワイルド研究、査読無、12 号、2012、79-86

③ 秦邦生、21 世紀の生のためのキーワード――新しい批評のことば 第９回: 気持ち／感情、Web 英語青年、査読無、156 巻、2010、2-9

④ 秦邦生、セイレーンとマニフェスト――ヴァージニア・ウルフと前衛的公共性の問題、『ヴァージニア・ウルフ研究』、査読有、26 巻、2009、37-54

⑤ 秦邦生、「恥辱」を分かち合う――J・M・クッツェー、『恥辱』における異種混交性と情動、『津田塾大学言語文化研究所報』査読無、24 巻、2009、33-43

〔学会発表〕（計４件）

① KUNIO SHIN、Sirens’ Death, Birth of Manifestoes: Towards A Reconsideration of Modernist Publicness、December 1910 Centenary Conference Centenary Reflections and Contemporary Debates Modernism and Beyond、2010 年 12 月 11 日、University of Glasgow (UK)

② 秦邦生、深淵の批評／批評の深淵――ワイルド、ユートピア、モダニズム、日本ワイルド協会第 35 回大会、2010 年 12 月 4 日、 應義塾大学三田キャンパス研究棟 A-B 会議室

③ 秦邦生、「感情」の否定？―モダニズム、情動、ロレンス、日本ロレンス協会第 41 回大会、2010 年 6 月 26 日、 早稲田大学早稲田キャンパス 11 号館 4 階大会議室

④ 秦邦生、〈るつぼ〉の中のモダニズム――ウィンダム・ルイス、人種、ファシズム、日本英文学会関東支部大会、2009 年 11 月 7 日、 成蹊大学吉祥寺キャンパス

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
秦 邦生（SHIN KUNIO）
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：21720101

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし